様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５３０２８９
研究課題名（和文）　戦前日本の金融システムの進化パターンーーー制度変化のメカニズムからの接近
研究課題名（英文）　The evolution of the financial system in prewar Japan; a political economic approach

研究代表者
寺西　重郎（TERANISHI　JURO）
日本大学・商学部・教授
研究者番号：７００１７６６４

研究代表者の専門分野：金融論
科研費の分科・細目：経済学　財政学・金融論
キーワード：金融論　戦前期日本　金融システム　制度変化　政治経済学

１．研究計画の概要

戦前期日本の金融システムにおいて、銀行中心のサブシステムと金融市場中心のサブシステムがいかなる競合・補完と分業の関係にあったかを考察し、其の役割分担の実態を整理するとともに、金融システム全体として銀行中心・市場中心のいずれの方向に向かっていたか、すなわちシステムの動学的な進化の方向を検討する。金融システムの機能を、資金動員、資金配分（情報生産とリスク負担）および企業統治の３側面から捉え,その機能が限界に達したときに生じる政策的対応として制度変化を把握する。まず当時の経済知識やそれを盛り込んだ政策構想がいかなるものであったかを調べる。つぎに、関係する利害集団の行動様式と力関係、経済思想が人々の制度改革行動に及ぼした影響、の２点を比較しつつ制度変化のメカニズムと方向を分析する。

２．研究の進捗状況

当初の研究目的に掲げられた３つの問題について概略次のような結果が得られつつある。

第一に、戦前期金融システムは、銀行の優勢によって特徴づけられるのか、それとも市場の優勢によって特徴づけられるのであろうかという問題については、資金の動員、資金の変換、資金の配分、企業統治などの機能は、銀行と市場という二つのサブ・システムによってある種に役割分担がなされたことを示した。簡単に言うと富裕層の資金は市場的に流れ、零細資金は金融仲介機関経由で産業資金として活用されたということである。第二に、戦前期の金融システムの変化はどのような要因とどのようなメカニズムによって生じたのであろうかについては、それにかかわる政治過程をある程度明らかにした。第三に、戦前期の金融システムはどの方向に向かって変化していたのであろうか、という問題については、戦前期の金融システムは、歴史的趨勢として、戦後高度成長期の銀行中心の金融システムに向かって変化していたということを示唆する分析結果を得た。この分析では、金融制度の決定権を持つ階層がどれであるかがクルーシャルな意味を持つ。これまでの分析では伝統的中間層が昭和恐慌を境に疲弊の度合いを強めたこと、小作人や労働者などの零細層が１９２５年の男子普選以降強い決定権を持つにいたったことの影響をとらえることにある程度成功したものと考えている。現在これまでの成果を一応単行本の形に取りまとめており、岩波書店から刊行の準備を進めている。

３．現在までの達成度

ほぼ予定通り進行中である。

（理由）この問題に関しては、約３０年の研究蓄積があり、統計作業的にはほぼ順調に進展した。もちろんデータ整理や推計はほとんどすべて新たにやり直したので大変なインプットを要した。科研費による資金的支援は感謝に堪えない。問題はその過程で重要な論点仮説に関して有効な仮説を開発しうるかどうかであったが、幸いにして一応学会への問題提起に値する仮説に到達した。

４．今後の研究の推進方策

（１）国際比較的な部分がいまだ全く手をつけられていない。この点では、さまざまな方

法を考えたが、結局日本と全く対照的な金融システムの発展過程をたどったアメリカの経験との比較を行う予定である。期間は戦前期でほぼ独立戦争以後である。
（２）経済思想の果たす役割については、脳科学・認知論・解釈学哲学等新たなアプローチが次々と生まれつつある。これらをとりこんだ金融制度変化論に取り組みたい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
寺西重郎「明治大正の投資家社会」『（成城大学）経済研究所　年報』２２号　５－５２頁　２００９年　査読なし